

thorough. Netland concludes that

“any epistemologically acceptable theory of religious truth must recognize that beliefs are integral to religion and that truth in religion, just as in other domains, must include the notions of propositional and exclusive truth.”

Concerning the religious content of other religions and epistemology he reasons that

“Christian exclusivism does not entail that all truth worth knowing is to be found within Christianity, although it will hold that all truth, regardless of where it is found, is God's truth and is compatible with God's revelation in Scripture. Christian exclusivism simply affirms that where the beliefs of other religions are incompatible with those

of Christian faith the former are to be rejected as false.”

With regard to areas of concern I wonder if Netland's thesis would have been strengthened by David Bosch's very helpful “fourth Way” model, found in his earlier work (*Theology of Religions*, UNISH, ch. 6). At times Netland wants to say “yes” to what he finds in other religions (as seen in the quote above) and at other times he wants to say “no”. Bosch's historical and theological overview of “abiding paradox” would have made that task easier in this book.

Taken on the whole I found this book to be well written and one that should be found in the library of those interested in theology of religions!

[Missiology and South Asian Studies]

〔書評〕

バーバラ片岡・西尾道子『聖書の英語（旧約篇）：現代英語を読むための辞書』

サイマル出版 1982年5月 285ページ

西尾道子『新約聖書の英語：現代英語を読むための辞書』

サイマル出版 1990年4月 216ページ

松 本 曜

“To go the extra mile for peace,” Bush said, he would receive Iraqi Foreign Minister Teriq Aziz in Washington. *Newsweek*, May 13, 1991

湾岸戦争を前にしてのブッシュ元大統領

の発言である。この英語の文の中に聖書から来た表現があるのに気が付くであろうか。go the extra mile がそうである（マタイ 5:41参照）。この様に、英語の雑誌や文学作品などを読んでいると聖書に基づいた表

現や例えがよく出てくる。上の例であれば、聖書からでた表現かどうかにかかわらず、熟語として知っているかどうかの問題だが、中には聖書のストーリーを知らないと十分に理解できない場合もある。例えば、次のような例である。これは湾岸戦争のシュワルツコフ総司令官がサダム・フセインをゴリアテに例えているものである。

“Saddam Hussein is sort of like *Goliath*, out there storming around in front of our troops and saying, ‘Come on out here and fight me,’” he said. *San Francisco Chronicle*, Feb. 5, 1991

このような事情もあって、かねてから英文学者、英語学者による聖書の表現の研究といったものは日本でも幾つか出版されてきた²⁾。今回、ここに書評として取り上げたのは、聖書に基づく表現が現代英語の中にとどく様にして使われているかに関する、英語学習者向けの最近の著作である。(本のタイトルが誤解を招くかも知れないが、聖書の英語訳自体に使われた英語表現全般に関する書物ではない。)副題が示す通り、辞書としても使えるように意図されている本である。この二つの本はタイトルが少々異なっているが、同じ物の旧約編、新約編として企画されたものようである。同時通訳に関する本を多く出しているサイマル出版からの出版で、通訳の際に生じうる問題を意識しての出版と思われる。著者は片岡氏がカトリック信者の美術評論家、西尾氏はノン・クリスチャンで、お茶の水女子大学助教授である。

まずは、この二冊の本の簡単な紹介をす

ると共に、この本の長所と短所を指摘し、さらには取り上げられていない表現などについて触れてみたい。

1. 構成

聖書に基づく表現と言っても、聖書に於ける元の意味が残っているものもあれば、表現だけが一人歩きをして、聖書から出た表現とは意識されない場合もある。さらには、特定の聖句に基づくものではなく、聖書の中の人物像や事件を引き合いに出す、と言った例もある。この本で扱われている表現にはこれらの違った種類のものが含まれている。

構成は、読み物として読めるように、テーマに従って表現を分けて解説している。それと同時に、アルファベット順に語句の索引があり、辞書としても活用できるようにしている。旧約編では86、新約編では74の表現が扱われており、英語に対する聖書の影響力に驚くばかりである。この点では千代崎秀雄『日本語になったキリスト教のことば』(講談社)と比較すると面白い³⁾。千代崎師の本に出てくる語句の多くが教会関係の用語であり、聖書自体からの語句は非常に少ない。

それぞれの表現については、先ず、関連する聖句が Revised Standard Version と新共同訳で引かれ、その表現の由来を説明すると共に、その表現が新聞、雑誌、小説等において使われた例を紹介し、解説を加えている。

扱われている表現は次の通りである。旧約編では、第一章では、「創造」をテーマに in the beginning; let there be light; God created

man in his own image; Sabbath; when the spirit moves him; what hath God wrought; Garden of Eden; Adam; flesh of my flesh, 第二章では罪悪感 (guilt) に関するものとして, forbidden fruit; first bite of the apple; fig leaf; Adam's apple; brother's keeper; mark of Cain; scapegoat; Noah's ark, 第三章としては誘惑に関するものとして, lucifer; worship the golden calf; Jezebel; David and Bathsheba, 第四章では罰に関するものとして Tower of Babel; Sodom and Gomorrah; plague of Egypt; seven lean years; visited by sins of their fathers; handwriting on the wall; wearing a hairshirt; sow the wind; reap the whirlwind; eye for an eye; woe to, 第五章は障害と艱難として, stumbling block; David and Goliath; Jonah; patience of Job; Jeremiah; lion's den / fiery furnace; at wit's end; the race is not to the swift, nor the battle to the strong; in jeopardy of their lives; valley of the shadow of death; sacrificial lamb, 第六章は祝福, 報い, 宝として, Joseph's coat of many colors; promised land; land flowing with milk and honey; Moses' burning bush: Exodus; apple of the eye; rock; sing praises; fruits of their labor; King Solomon's riches; my cup runneth over, 第七章は契約, 権威として, Covenant; Ten Commandments; come, let us reason together; Elijah's mantle; set your house in order; God save the King; meet one's maker; laws of Medes and Persians; host of Midian; cast its lot; gird loins; broken reed; peaceable kingdom, 第八章は知恵-愚かさとして, price of wisdom is above pearls; clay feet; double-edged sword; play the fool; pride goes before the fall; lamb

led to the slaughter; holier than thou; where-withal, 第九章は生活の糧として manna; man does not live by bread alone; cast your bread upon the waters, 第十章では生活の知恵-伝統として a season for everything; parting of the ways; my days are numbered; nothing new under the Sun; spare the rod, spoil the child; like mother, like daughter; leopard changing his spots; root of the matter, となっている。

新約編では先ず, 登場人物として, Jesus/Christ; Messiah/Saviour; Mary; John; Peter; Paul; Doubting Thomas; Judas; apostles; Lazarus; Pilate; Pharisees; Ananias, 第二章としては, 山上の説教として, sermon on the mount; do unto others; the meek shall inherit the earth; salt of the earth; turn the other cheek; let not thy left hand know what the right hand is doing; no one can serve two masters; mote in one's brother's eye; do not throw pearls before swine; a wolf in sheep's clothing, 第三章ではイエスの生涯と宣教として, Bethlehem; voice in the wilderness; fisher of men; walk on water; love your neighbor as yourself; good Samaritan; prodigal son; not a sparrow falls; lay down one's life; cast the first stone; render to Caesar; house divided against itself; new wine in old bottles; the blind leading the blind; millstone round one's neck; weeping and gnashing of teeth; separate the sheep from the goats; whited sepulchres; the eleventh hour, 第四章はイエスの受難と復活として, bear one's cross; Hosanna; the stone would cry out; thirty pieces of silver; Gethsemane; thy will be done; wash one's

hands; Golgotha; crucifixion; resurrection, 第五章はパウロの回心と思想として, scales fall from one's eyes; hope against hope; faith will move mountains; all things to all men; labor to love; fight the good fight; unto the pure all things are pure; powers that be; through a glass darkly; in the twinkling of an eye; reap what you sow; wages of sin is death, 第六章は審判の日として, gospel; heaven; paradise; Abraham's bosom; hell; fire and brimstone; antichrist; Armageddon; day of judgement; Jerusalem が挙げられている。

構成に関しては、旧約編のほうにもう一工夫出来なかったかと思う。語句を見て分かる通り、旧約からの引用には特定の聖書の語句と言うより、人物像が引き合いに出されているものが多い。旧約編に関しても新約編のように人物ごとのセクションをもうけると良かったのではないか。そうすれば、モーセ、ダビデのように様々な形で引き合いに出される人物を扱やすかったであろう。またその方が辞書として使う際にも使いやすであろう。

新約編のまとめ方は、地上でのイエスの生涯、使徒の活動、そして終末へと、関連する新約聖書の順に添っていて、読み進めていて実に面白かった。但し、肝心の最後が、Jerusalemとして新しいエルサレムの聖書箇所を引用しながら、扱われている用例が全てこの地上のエルサレムに関するものであったのは興醒めであった。新しいエルサレムに関する例がなければ、heavenに関するもので終えても良かったのではないか。

2. 内容について

本書の最大の長所はその例文の豊富さと、その中で聖書に基づく表現がどのような意味、イメージで使われているかに関して、的確な解説がなされている点である。聖書に基づく表現と言っても、使われている表現が聖書の本来の意味を離れて使われていたり、あるいは本来の聖書の箇所を誤解して使われていたりすることもある。そのような例についての説明は興味深かった。例えば新約編の Sermon on the Mount の項目には次の例とその解説が載せられている。

Emily was out of the driver's seat now and jerking open the carriage door. They were still rabbiting on and refusing to move, so she got hold of the skirt of the fat girl and pulled her stumbling down the single step. "You were rocking the carriage," she said. Melrose waited there with Peter Garret for the rest of the Sermon on the Mount as she helped each roughly from the carriage. (Grimes, *The Anodyne Necklace*)

「エミリーは御者台から降りて、馬車の戸を押し開けようとしていた。子供たちは未だ不平を言い続け動こうとしたので、彼女は太った女の子のスカートをつかんで、ひっぱりおろすようにした。「馬車を揺らしていたでしょう」とエミリーは彼女にいった。エミリーが他の子供にも乱暴に手をかしながら、馬車から下ろしているのをピーター・ギャレットと眺めながら、メルローズは山上の説教の残りが出てくるのかと待った。」

他にも○〇と言う悪いこと、××とい

う悪いこと、と並ぶだろうと予想し、その全体を山上の説教と呼んでいます。いつも繰り返される小言、お説教と言う意味で使われている例。(p.51)

一方、短所として、基にある聖句の説明について、的確な解説が所々で不足しているように感じられた。読んでいて、何故この点に触れていないのだろうかと思った箇所や、聖書自体についてどのような理解をしているのか、と思わされる箇所が幾つかあった。この点では、先にあげた千代崎秀雄師の著書の面白さの一つが、豊富な聖書知識が背景にあることにあるのと対照的である。

幾つか例を挙げよう。旧約編で a lamb led to the slaughter に関して、イザヤ53:7が引用され、それに関して次のような説明がある。

「主のしもべ」とイザヤ書で呼ばれている人の苦難が述べられた部分。このしもべが誰かについては諸説あって、イスラエルだと言う人も、国ではなくて個人だと言う人もいます。エレミヤやヨブと違って、不当に非難されても苦しめられても、この僕は黙って耐えるのです。(p.228)

ユダヤ教での解釈を考えれば諸説あるのは事実であろうが、この「主のしもべ」はイエス・キリストだと新約聖書が見なしていること(使徒8:35など)がどうして触れられていないのだろうか。

また、antichrist に関する説明で次のように書かれている。

反キリストはキリストに敵対する者、イエスがキリストであることを信じないも

のの意。この世の終わり、キリストの再来の前に現れるとされています。しかし現代の英語で使われる場合は、厳密に上の意味のみに限らずに偽のキリストと言う意味でも使われ、より広義に、正義と対立する悪の代表者といった意味でも使われます。…(新約編 p.198)

この説明だと、antichrist という語が偽のキリストと言う意味で使われるのは、聖書から離れて、現代の英語の中で使われるようになった用法である、と解釈されてしまう。確かに antichrist という語は、第一ヨハネにおいてキリストに敵対する者、イエスがキリストであることを信じないものの意味で使われているのみであるが、マタイ24:5,23などで語られている再臨前に現れる偽のキリストを antichrist と考えるのは、現代英語の話者に限ったことではない。

どの表現が聖書に基づく表現かについての認定においても一部疑問な点があった。例えば、旧約編で when the spirit moves him 「その気になった時は」を創世記1:2と結び付けるのには無理があるのではないか。

あと、Savior/Saviour の綴りについて、「救世主やイエスを指す場合には、アメリカでも our のつづりの方が普通です。」(新約編 p.11)とあるのは一体どうしたことか。イギリスで出された聖書の訳が引用されている場合以外は、アメリカで our の綴りは見たことがない。

なお、日本語は聖句、人名とも新共同訳に従っている。このため、ペテロはペトロ、パリサイ人はファリサイ人として出てくる。この点については注を付けたほうが良かったであろう。

3. 取り上げられていない表現

この二冊の本に取り上げられていない聖書の表現は数多くある。特に新約からのものは扱われていないものがかなり有るように思う。冒頭にあげた *go the extra mile* もそうである。他にもこのような例はなかったのか、と思うものについて幾つか触れよう。

Maxwell had been accused just before his death of being an agent of Mossad, the Israeli intelligence arm, in a new book "The *Samson Option*," by Seymour Hersch. — *Newsweek*, Nov. 18, 1991

引用されている本を読んでいないのはつきり分らないが、サムソンが自ら秘密を暴露してしまった事を言っているのであろう。ほかにもサムソンはアメリカで男性用下着のコマーシャルにも登場している。

Give us our daily bread — *Time*, Dec. 3, 1990 (マタイ6:11から)

ソビエトの食糧問題に関する記事の見出し。

On average, their short-term loans are almost twice the size of their annual incomes, according to Elizabeth Warren, coauthor of a new bankruptcy study "*As We Forgive Our Debtors*" — *Newsweek*, Nov. 18, 1991 (マタイ6:12から)

Pan Am's collapse is a *sign of the times* for US Airlines. — *San Francisco Chronicle*, January 9, 1991 (マタイ16:3などから)

Good and Faithful Servant: The Unauthorized Biography of Bernard Ingram (マタイ25:21, 23などから)

サッチャー首相の右腕であった人に関する

本のタイトル。

But the wah-wah guitar solo is full of surprise and has a crazy inner logic: a guitar *speaking in tongues* — *Newsweek*, March 23, 1992 (I コリント12:10など)

In life, the reggae singer Bob Marley disdained the impediment of what he called "*Babylon*" — modern Western civilization — such as lawyers, preachers and barbers. — *Newsweek*, April 8, 1991 (黙示録18:1などから)

この他にも、*sin, salvation, miracle, healing, talent* といった単語についても取り上げることもできたであろう。特に、*sin, salvation* のようなキリスト教の基本教理を背景に持った語こそ、一般英語学習者に対して説明が必要であるように思う。

このように聖書に由来する表現は本書に取り上げられているもの以外にもまだまだある。

このようにあげていくと、読取りができたかどうかは、結局は聖書をどれだけ知っているかにかかってくるように思う。

4. 結び

以上のような弱点はあるものの、このような英語の聖書に基づく英語表現に関する解説書が出されることは、英語学習者には歓迎すべきことである。このような本がきっかけとなって聖書自体にも関心が深まることを期待するものである。その一方、さらに深い聖書理解を日本の英語研究界に期待したい。

- 1) 例えば、市河三喜著『聖書の英語』（研究社）、ストッフエル著『聖書の語句及び表現』（研究社）、志村武編『聖書理解和英小辞典』（南雲堂）、L. E. ネルソン著（清水汎訳）『聖書の足跡』（山本書店）など。このほか、アメリカで出版され、日本で訳書が出ていないものに次のものがある。*A Dictionary of Biblical Allusions in English Literature*, Walter B. Fulghum, Jr. Holt, Rinehart & Wilson.
- 2) ここで「聖書の表現が現代英語で使わ

れている」とか「聖書のある表現が日本語になった」とかいうのは、聖書の表現が、特にキリスト教のコンテキストでなくても使われ、理解されるようになった、という意味である。つまり、一般言語学、国語学の用語で言えば、特定の register、位相で使われる表現から、そうでない表現に変わった、という意味である。

[一般言語学・意味論 専攻]